

(始良郡始良町西餅田小倉畑)

位置と環境

本遺跡は、始良町の南部平野部をほぼ南北に流れ河口部で加治木町との境をなす別府川の西方約1kmに位置し、段丘が上位と下位の2段に立地している。

上位の段丘は微高地となり、標高約9～10m前後のほぼ平坦面で、現在は宅地として利用されている。下位の段丘は標高約5mで、水田として利用されており、別府川の旧河川跡が取り残され、三日月湖として残った可能性が強いと考えられている。

調査の経緯

本遺跡は一般国道10号線始良バイパス建設計画に伴って、建設省（現国土交通省）九州建設局鹿児島国道工事事務所からの調査依頼を受けた鹿児島県教育委員会により、昭和58年（1983）5月に分布調査を行って発見された古代の遺跡である。

平成6年（1994）には中原A・B遺跡において発掘調査を行っていたが、国道10号にかかる重富橋が、災害の影響で通行止めとなったために、盛土による暫定道が本調査区を通ることとなった。

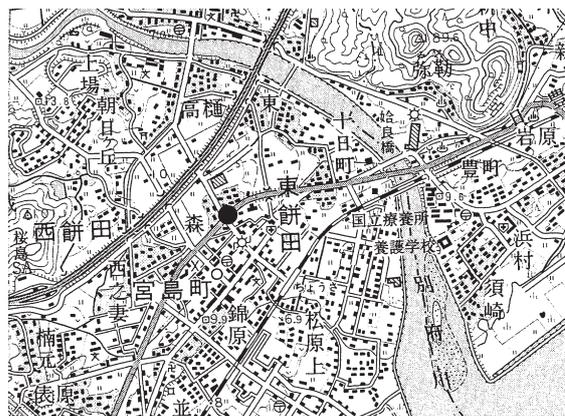
そこで、始良バイパス建設予定地内にあった本遺跡の調査を行うこととなり、平成6年7月5日～平成7年3月28日まで行った。未調査区については平成9年（1997）9月4日～11月27日までに調査が行われ、調査面積は11,000㎡である。

遺構と遺物

本遺跡の主体となる時代は古代である。検出遺構は、遺跡の上位の段丘から10世紀中ごろの方形周溝墓が検出され、土師器の黒色土器や甕のほかに、鉄製の紡錘車・刀子などが副葬されていました。紡錘車が副葬されている例としては熊本県上ノ原遺跡が知られているが、これによって葬者の性別を決定するまでには至っていない。

出土遺物は、縄文時代中期の阿高式土器、縄文晩期の入佐式土器、古墳時代の成川式土器なども少量が出土しているが、本遺跡の主体をなす坏・埴を中心とした土師器、須恵器、鉄製品、木製品、植物遺存体、昆虫遺存体など多量の遺物が発見されている。

遺跡の下位の段丘からは、香炉・鉄鉢の土師器模



第1図 小倉畑遺跡の位置

造品などのほか、灯明皿として使用された坏などが多量に出土している。

香炉は久留米市のへボノ木遺跡で出土例があり、鉄鉢は薩摩国分寺等で出土している。墨書土器も20点出土している。読みが確定してないものも多いが、「寺」の可能性のあるもの1点も出土している。文献には記録が残っていないが、出土品から古代の寺院が付近に存在していたと思われる。また、カヤの木で作られた付札状木製品は「ササラ」という楽器の一部である可能性が高い。

特徴

本遺跡は、周辺に「豊留」という、古代において隼人を慰撫するために大分県からの移住が想定されている地名が付近に存在している。また、本遺跡の北西約1.5kmの宮田ヶ岡窯跡では大隅国分寺の瓦を製作しており、西に1km弱に位する小瀬戸遺跡では、地方官衙等の存在が想定されている。そして、古代の官道の跡であると思われる場所も始良町教育委員会が発掘調査を行っており、古代において、重要な位置に当たっていた可能性が高い。

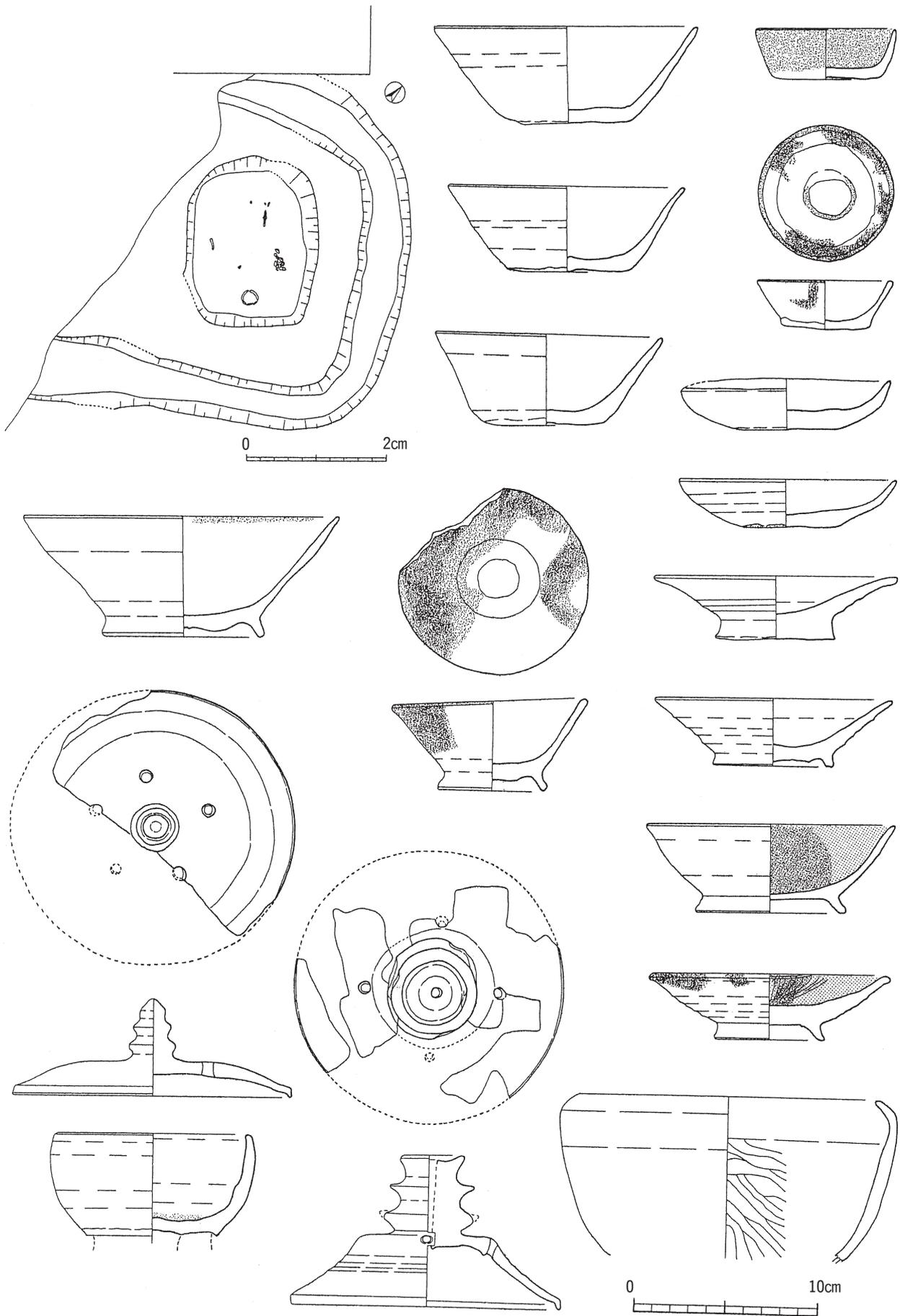
ただし、本遺跡の下位の段丘における出土遺物は流れ込みによるものである可能性が高く、寺院は旧別府川の上流部に存在していたものと思われる。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2002「小倉畑遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』



第2図 小倉畑遺跡検出遺構及び出土遺物